

「フクシマを思う」集まり

6月初旬の夜7時から、東京・吉祥寺にある光専寺で「フクシマを思う」集まりが開かれた。宇宙飛行士で元TBS記者である秋山豊寛さんによる「原発難民となった宇宙飛行士」の講演、俳優・アーティストの金子あいさんによる二階堂晃子詩集「悲しみの向こうに―故郷・双葉町を奪われて―」の朗読等が行われた。

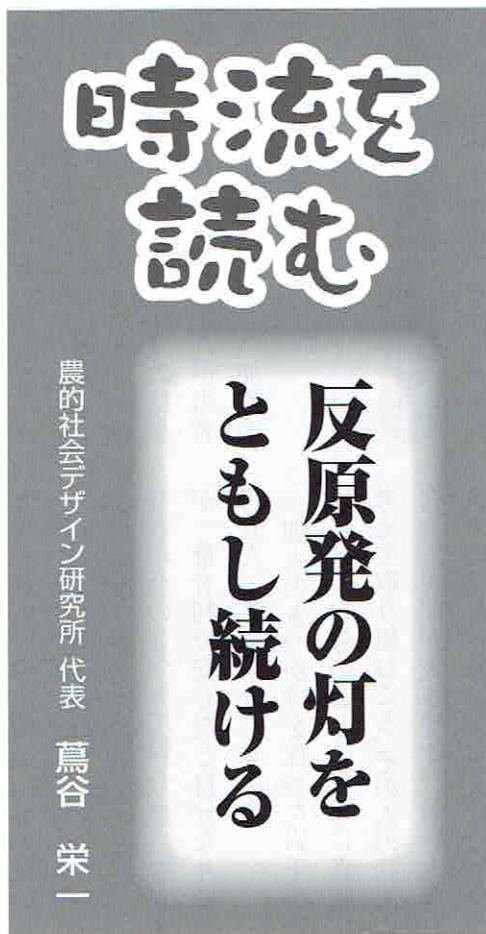
50人ぐらいの集まりかと思っただけで、出かけてみたところが、200人を超えていたのではなからうか。本堂はいっぱいの人であふれかえっていた。平日の夜の催しでもあり、総じて高齢層が多くを占めていたが、会場を包む熱気ともいえない不思議な空気が充満していた。

風化する原発事故

進行役もつとめた金子さんが語るように、原発事故の風化は著しい。事故があつて間もなく、3月23日には東京の金町浄水場の水道水から1キログラム当たり210

ベクレルの放射性ヨウ素が検出され、都は乳児が飲む粉ミルク用の緊急対応として24万本のペットボトルを配布したが、この報道がなされるやいなや都内のスーパーからペットボトルが払底してしまったことがあつた。福島だけでなく東

に。日常性を取り戻し、原発事故は福島の問題と受け止めるようになってしまっている。また政府も企業も再稼働を目論み、マスクも原発事故にはふたをしているだけ。新経団連会長に就任した中西氏の出身母体である日立製作所



反原発の灯を
ともし続ける

京でも原発事故が現実の恐怖となり不安ともなった。また原発事故が全国各地で起こってもおかしくはない、いつでも自らが被害者になり得るとの意識を共有していた。

それが今では国民のほとんどは反原発、脱原発どころか、完全

は、イギリス中部での原発建設計画を推し進めようとしている。

歴史的必然ではない原発

吉祥寺の集まりから帰宅したところ友人のU氏からメールが入っていた。先に亡くなった思想家の

吉本隆明が、「日本農業の衰退は自然史の流れ」と述べているのは間違っている。食料の安全保障、自給を維持していくところから日本農業を位置づけ直していくことが必要だとの筆者の見解への回答に関連しての話である。独自の近代化論を展開している渡辺京二の最新著『原発とジャングル』なる本を紹介し、そこで吉本の原発反対運動を批判しての「原発がいやらならジャングルへ戻れ」との発言に、渡辺は「原発は廃棄すべきだ」と反論。「問題は、物質文明＝科学技術の進展は不可避な自然過程かどうかということだ。・・・そう考えるのも無理はないと認めつつ、私はそうは思わないとあえて言いたい。必然のワナから自覚的に抜け出せるのではなくて、人間に生まれた甲斐がないと思うからである」との引用があつた。

高齢層中心とはいえ、多くの人が集まったことは貴重だ。後世のため、自らのためにも、反原発、脱原発の灯を消してはならない。